

と考えられた。この内、FS 細胞は抑制性介在ニューロンと推定される。今後、各神経細胞群のサッカー課題に対する役割を検討する予定である。

自由 26

非ヒト霊長類における肝炎ウイルス（特にE型肝炎ウイルス）の分子疫学的研究

平野真, 丁 欣, 阿部賢治 (国立感染症研究所・病理)

我々は、日本国内の各種霊長類における抗E型肝炎ウイルス (HEV) 抗体の保有率を調べた結果、4種のマカク、すなわちニホンザル、カニクイザル、アカゲザル、タイワンザルに抗 HEV IgG 陽性の個体を見いだした。抗 HEV IgG 陽性率は加齢と共に上昇する傾向を示し、またニホンザルに関しては、高い陽性率を示す群があった。ウイルス感染初期に高値を示す IgM が陽性の個体は見られなかったけれども、我々は、ニホンザルが HEV の宿主となっている可能性を想定し、検出感度の高い逆転写・入れ子式ポリメラーゼ連鎖反応 (RT-nested PCR) 法でニホンザル検体から HEV ゲノム RNA を検出できるか否か試みた。

本共同利用研究することで、6個体と少数ながら HEV の増殖する肝臓のサンプルの提供を受け、HEV ゲノムの2ヶ所の領域 (ORF3 および ORF2) に RT-nested PCR 法を適用したが、いずれも陰性だった。次いで、抗 HEV IgG が陽転していない若年個体の血清サンプルを新たに入手することができたので、これら血清についても同様に検出を試みたものの、すべて陰性だった。

以上の結果から、日本国内のマカクに HEV が感染している可能性を完全に否定することはできない。しかし、日本国内の非ヒト霊長類に HEV と交差反応性を示す類似のウイルスが感染している可能性をより重視すべきであろう。

自由 27

霊長類を対象とした動物福祉のための飼育環境評価法の開発

森村成樹 (林原生物化学研究所・類人猿研究センター)

飼育下の霊長類の行動は、性や年齢などの個体特性、集団構成、物理的環境特性によって異なる。本研究では、動物福祉の観点から飼育環境の評価法開発を目的とし、異なる飼育環境のチンパンジー2集団 (わんぱくこうちアニマルランドと林原類人猿研究センター) の行動を比較した。また、ニホンザル1集団 (霊長類研究所) について、放飼場の移動にともない物理的環境の変化が行動に与える影響を検討した。一方、動物福祉に配慮した飼育には、日常の行動を記録したり、環境エンリッチメントの効果を評価し、飼育管理へ反映させる必要がある。行動データは記録・分析に多くの時間と手間を要するため、飼育に生かすことが難しい。そこで、観察で PDA (SONY PEG-NX70V) 1台を利用し、簡便な記録・分析方法も検討した。行動記録用プログラムは NS Basic/Palm 3 (NS Basic 社製) を用いた。観察は、個体追跡法 (1セッション 60分) とした。その結果、2ヶ所のチンパンジーの行動比較では、採食や移動など飼育環境によると考えられる行動の差異が検出された。ニホンザルでは、飼育環境が変化した前後で個体間距離といった空間利用に差異が見られた。さらに、PDA を利用することで訓練せずに平均 11.4 秒で個体名、行動、位置を記録できた。本年度 PDA による記録法はほぼ完成した。今後は、さらに観察例を増やし、飼育環境の評価法の開発を進める。